

子どもの社会学におけるフェミニスト研究の概観 —ポスト構造主義アプローチを中心に—

藤田 由美子

An Overview of Feminist Research on the Sociology of Childhood:
Centered on Poststructuralist Approach

Yumiko FUJITA

Abstract

The purpose of this article is to examine the issues presented in the literature on feminist research on the sociology of childhood. I focus on the feminist poststructuralist approach within the sociological research on childhood.

The rise of research on sex differences in the 1960's enabled us to focus on the presence of a 'woman' more than a 'man' which was the sign of the unitary category of people. In 1970's, the focus of discussion changed from the presence of sex differences to the mechanism of its acquisition. Many analyses of sex roles were conducted to examine the process of acquisition of gender identity.

By the second wave of feminism, we became aware of a system of oppression in line with the notion of sex/gender as socially constructed. Feminism led us to do research on gender, which led to exploration of socially and culturally constructed gender.

I review the literature on the feminist poststructuralist approach in the research on children. Feminist poststructuralist approach allows the reconsideration of subjectivity and adult-child relation as well as gender dichotomy.

This article concludes with the significance of feminist poststructuralist approach and remaining questions are presented.

Keywords : Sociology of Childhood, Feminist approach, Gender, Feminist Poststructuralism, Subjectivity

キーワード : 子どもの社会学, フェミニスト研究, ジェンダー, フェミニストポスト構造主義, 主体性

はじめに

本稿の目的は、子どもの社会学におけるフェミニスト研究について、主に欧米の研究動向を概観し、その意義および課題の抽出を行うことである。

子どもを対象とした社会学において、性別は年齢・月齢とともに、主要な変数のひとつとして扱われている。

それは、発達を捉える指標として、生物学的に自明のものとして扱われてきた。

しかし、近年、とくに1980年代以降、性別を生物学的に自明な区分ではなく社会的・文化的な構築物として扱う研究、いわば「ジェンダー」研究は、数多く行われている。その取り扱う範囲は、子どもの遊び、テレビ等のメディア接触、家族や仲間とのコミュニケーションなど

さまざまである。

この「ジェンダー」研究の発展には、性別役割分業の廃絶や性・生殖における女性の自己決定権などを主な主張とする第二波フェミニズムが背景にあった¹⁾。この思想の導入により、女性を本質的なものとして自明視することは問題視されるようになった。

第二波フェミニズムは、男性との平等を志向する立場、女性性を礼賛する立場、そして女性性/男性性の二分法を自明視しない立場に分けることができる。最後の立場はポストモダン・フェミニズムと呼ばれ、フェミニズムとポスト構造主義との融合により導かれたものである。

本稿では、子どもの社会学におけるフェミニスト研究のうち、フェミニストポスト構造主義アプローチに注目する。それは、従来のジェンダーに関する概念の問い直しばかりではなく、「子ども」概念の問い直しにもつながると考えられるからである。

本稿においては、次の手順で論を展開する。まず、子どもの社会学における性変数の取り扱いの変遷を概観する。続いて、子どもを対象とした社会学のフェミニスト研究を、ポスト構造主義アプローチを中心に概観する。最後に、残された課題を抽出し、若干の考察を行う。

性差研究から性役割研究へ

1. 性差への関心

「子ども」というカテゴリーは、近代に入り登場したといわれる。子どもは純粹・無垢な存在であり、大人たちによるかわいがりの対象となった。その一方で、かれらは、大人になる前の未熟な存在であるとみなされ、教育の対象となった²⁾。

子どもは、近代的な科学のまなざしのなかで発達する存在として取り扱われてきた。かれらを対象とした教育学的・心理学的研究において、性別は年齢・月齢とともに変数のひとつとして扱われてきた。

性別カテゴリーそのものを研究の軸にすえた研究としては、性差研究がある。その基盤には、男と女は異なる存在であるか否か、という議論があった。

マッコピイとジャクリンは、*The Psychology of Sex Differences* (『性差の心理学』)において、乳児期より成人期まで幅広い年齢層を対象とした性差研究の動向を概観した³⁾。彼女たちは、その中で、しばしば男性が優れているといわれる視空間能力、女性が優れているといわれる言語能力など、さまざまな能力における性差の有無について、多くの研究結果を参照して検討した。その結果、先行研究は、実験の設定およびサンプルによって

かなり差異があるために、男と女の間に明確な差異があると断言することができない。また、それが生物学的な性差であるか否かという議論についても、明確な答えは出されていない。

東と小倉もまた、性差を取り扱った先行研究について概観を行った。かれらは、数学的能力や攻撃性が男子に高く、言語能力は女性に高いといった傾向は若干みられるものの、あくまでも平均に過ぎないと論じた。かれらは、結果としてあらわれた性差も、それぞれの性にふさわしいとされる性役割行動が後天的に学習された結果であると考えた⁴⁾。

2. 社会的・文化的につくられる女と男

—ジェンダー概念の導入—

性差研究においては、生物学的差異が行動・能力を規定するという言説は否定されていない。しかし、性はまったく生物学的に決定されるというわけではなく、無視できない程度、社会的・文化的につくられている部分があるという議論が行われるようになった。そのきっかけとなったのは、性科学者ジョン・マナーとジャーナリストパトリシア・タッカーの著作である。

マナーとタッカーは、その著作『性の署名』において、性は生物学的に決定されるのではなく、社会的・文化的に決定されること、人が言語を習得するように学習されることを明らかにした⁵⁾。マナーとタッカーは、「変性者(人生の途中で生物学的性を変更した人)」の事例より、生物学的な性と社会的・文化的性のずれが生じうることを発見した。かれらによると、「性自認(ジェンダー・アイデンティティ)」は、言語の獲得と同じように行われるという。ある一定の年齢(おおよそ2歳前後)以降は、いかにその後生物学的性の修正が行われたとしても、「性自認」の変更はできない。

かれらの議論をきっかけに、生物学的性としての「セックス」と社会的・文化的性差としての「ジェンダー」は、まったく別のものであることが明らかにされた。しかも、私たちが呪縛されている性は、解剖学的宿命よりも、社会的・文化的なものが大きいのである⁶⁾。

3. 性役割研究

1) 性役割(sex roles / gender roles)の社会化への関心

性役割は、女性あるいは男性に割り当てられる社会的・文化的役割である。

フェミニズムにおいては、性分業の仕組みは社会的な体制であると論じられている。この体制の内部では、女

性と男性には生物学的性（セックス）を基盤とした社会的・文化的に異なった役割が割り当てられている。マルクス主義フェミニズムにおいては、男性は公的領域で生産労働に従事し、女性は私的領域で（労働力の）再生産労働、具体的には家事・育児に従事する、という性分業の存在が問題とされた。

先に述べたように、心理学的研究においても、子どもたちのさまざまな能力やパーソナリティにおける差異＝性差を生み出すメカニズムとして、性役割の学習が注目されていた。子どもたちがいかにして性役割を獲得していくかに注目した研究は、1970年代から1980年代にかけて数多く行われてきた。これらのうち、主として社会学あるいは教育社会学の分野において行われた研究は、「性役割の社会化」研究と称されている。

性役割の測定にあたっては、多くの場合、心理学者によって開発された性役割尺度⁽¹⁾が用いられた。こういった尺度で測定された性役割（あるいは性差、性度）について、それと攻撃行動やメディア視聴行動などの行動の関連、または、達成動機や自尊心などの意識・態度との関連が検討された。

性役割の社会化が子どもの達成動機や進路達成にどのような影響を及ぼすかを検討した研究は、数多く行われた。たとえば、カーとメドニックは、黒人の就学前児童を対象に、性役割の社会化の状況が達成動機にどのような影響を及ぼすかを検討した。その結果、非伝統的な性役割のトレーニングは、女子の高い達成動機につながり、伝統的な性役割のトレーニングは、男子の高い達成動機につながる事が明らかにされた⁷⁾。

子どもを対象とした研究としては、遊びと性役割の関係を検討したものも多い。とりわけ遊びや玩具の選択は、性役割との関係で論じられてきた。それは、男の子向け／女の子向けの玩具または遊びが社会的コンセンサスとして存在し、子どもたちは性役割の学習を通して自らの性にふさわしいとされる玩具または遊びを選択する、という仮説に基づく。レーバーは、男の子の遊びは女の子の遊びよりも集団規模、目的、規則、チーム編成の点で複雑であることを明らかにした⁸⁾。また、カメロンらが行った調査によると、自らの性にふさわしいとされる玩具を選ぶ子どもは、性によって類型化された行動を行う傾向にあった⁹⁾。

コミュニケーションのパターンと性役割の関係については、主として社会言語学の知見を適用して検討されてきた。女性＝受動的／男性＝能動的、といった役割パターンが析出されている⁽²⁾。デーヴィスは、異性どうしがはじめて出会う場面を設定したときの両性間のコミュ

ニケーションパターンを分析した。その結果、男子は女子に比べて自己主張が強く、女子は譲歩するなどといった役割分化が見られるという知見を得た¹⁰⁾。

性役割の獲得に影響を及ぼすとされたのは、親、そのほか意味ある他者、マス・メディアなどである。親などの大人たちのかかわり方は、子どもの性役割行動を強化するものとして検討された¹¹⁾。マス・メディアと子どもの性役割発達の関連は、多くの研究で論じられた⁽³⁾。多くの実験調査研究は、メディアへの接触が性役割行動や態度に影響を及ぼすという因果関係を示していた⁽⁴⁾。

2) 性役割研究の意義と限界

性役割分析の豊富な蓄積は、1970年代後半以降の男女平等を目指す世界規模での行動計画など、男女の役割を見直すためのさまざまな社会変革の基礎となった。近代社会が依拠する「性別役割分業」体制の問い直しに対する実践的な処方箋を提示しうる点で、その意義は大きい。

しかし、性役割分析は、あくまでも生物学的な性としての〈男〉－〈女〉を基盤としていることは否めない。したがって、たとえば「家事・育児は女の仕事」、「男は体力があるから力仕事に向いている」といった本質主義的ディスコースに基づく考えを批判することができても、二分法的なジェンダー・カテゴリーの自明性そのものはそれによって揺るがない。それゆえに、性役割分析は、「ジェンダー本質主義」の呪縛から抜け出すことはない。

抑圧からの解放を目指して

－フェミニスト研究の試み－

1. フェミニズムとは

フェミニズムとは、「女性解放思想、あるいはその思想に基づく社会運動の総称」(399頁)⁽¹⁾である。現在展開されているフェミニズムの議論は非常に幅広く、基盤となる社会認識も目指す方向性もさまざまである⁽⁵⁾。そのため、これらを一括して論じることは困難である。ただ、「女性は抑圧されている」という認識を基盤にしていること、そしてそこからの解放はいかにすれば実現するか、を問題にしている、という総括は可能であろう。

クリステヴァによるフェミニズムの流れは、デヴィーズにより次の三つに要約されている。「1.女は、象徴的秩序に接近する必要がある。リベラル・フェミニズム。平等。2.女は、差異の名における男の象徴的秩序を拒絶する。ラディカル・フェミニズム。女性礼賛。3.

(これがクリステヴァ自身の立場) 女は、形而上学的なものとしての男性的と女性的という二分法を拒絶する。(p.73)¹²⁾。すなわち、第一の立場は平等主義志向、第二の立場は女性礼賛、第三の立場はポストモダン志向である。

本節では、これらのうち、まず機会均等の実現を志向する「平等主義」的アプローチについて概観し、その意義と限界を明らかにする。その後、近代フェミニズムが依拠してきた「ジェンダーの二分法」そのものを批判する「ポストモダン」アプローチとしての「フェミニストポスト構造主義」について概観する。

2. 「平等主義」的研究

1950年代以降に欧米で興った第二波フェミニズム⁶⁾は、女性の参政権などといった制度的平等が達成された後も女性が従属的地位に置かれていることを問題にした。そのなかで、社会慣習や社会意識による性差別が問題にされた。マルクス主義フェミニズムは、男性は公的領域で生産労働に従事し、女性は私的領域で再生産労働に従事する、という性分業が社会システムに内在すると論じた。

1980年代以降、そのような状況からの女性の解放を志向する「教育の中の男女平等」が問題となった。たとえば、カリキュラムの中の不平等を見直す動き、教材における描写の性差を問い直す動き、などがあつた⁷⁾。

また、教室における教育実践も問題となった。サドカーとサドカー(1985)は、教室における相互作用の分析を通して、男子に比べて女子が教室で無視されていることを明らかにした¹³⁾。

ストライトマターは、男女平等のための法整備がなされた後も、依然として教育現場におけるジェンダー・バイアスと異なる性役割期待が存在するという問題意識のもとに、教師の教育実践におけるジェンダーを検討した¹⁴⁾。彼女は、幼稚園からハイスクールの8名の教師による教室での教育実践を観察し、教師の会話におけるジェンダー・バイアスを明らかにした。また、かれらにインタビューを行い、教育実践における男女平等の実態を検討した。その結果、教師が注意深く言葉を選定し、すべての子どもに平等にかかわることや、男子の教室支配に対する教師の適切な介入、ジェンダー・ステレオタイプへの敏感さ、などを、男女平等教育の鍵として導いた。

男女平等は、現代社会における、性による機会不均等を改善するためのひとつの戦略として今なお有効である。しかし、「平等」の内実については議論の余地も残されている。「男女平等」は、結局のところ、女性が

「男並み」の平等であることを意味する。この枠組みの中で、女性は男性となることによって平等を勝ち取ることを求められる。こうして男性と同じ舞台に立った女性は、「男性の亜種」あるいは「異なった種類の女性」となる。その結果として、女性というカテゴリー内部での断層が生じるという問題が指摘されている⁸⁾。

3. 「解放」と「脱構築」

—ポスト構造主義フェミニズムの試み—

1) ポストモダニズムとポスト構造主義と近代フェミニズム

ポストモダニズムは、20世紀人文社会科学に大きな影響をもたらした構造主義⁹⁾を批判して興ったものである。それは、主体-客体関係の問い直し、反本質主義を志向するものであった。

ポストモダン・フェミニズムは、ポストモダニズムをフェミニズム理論にさまざまな形で応用した一連の思想である。それは、近代的主体の問い直しおよび新たな主体の構築、ファルス中心主義批判、西欧中心主義フェミニズムの脱中心化、などさまざまな理論的射程を持つ。

フランシスは、ポストモダン思想とフェミニズムの間には、相容れない根本的な矛盾があると論じた。彼女によれば、フェミニズムは本質的に「近代主義=モダニズム」理論であり、女性に対する抑圧からの解放という「真の物語」に基づくものである。ポスト構造主義においては、これらの物語も、そして「女であること」すらも、脱構築される対象となる¹⁵⁾。

このように、近代批判の言説であるポスト構造主義は、それ自体、近代社会における抑圧された女性の解放を志向するフェミニズムをも問い直しの対象に含めるものであった。しかし、フェミニズムにとっては、「本質主義」の呪縛からのがれるための手がかりを提供している点で、ポスト構造主義との結びつきはたいへん有用であった。

2) フェミニストポスト構造主義

ポスト構造主義のフェミニスト的適用は、「フェミニストポスト構造主義」と称される。

西鉢(1998)は、「教育とジェンダー」研究において精緻化されるべき点について、①二分法的な性別カテゴリーを自明視することの問題、②権力関係を考察する必要性、③内面化を前提にすることの問題性、の三点であると¹⁶⁾。その有効な手がかりとして、フェミニストポスト構造主義の適用可能性を探った。その概要は、次の通りである。

第一に、ポスト構造主義は、差異の基盤となる二分法的ジェンダー・カテゴリーを自明視しない。性差・性役割研究も男女平等教育研究のいずれも、人間は〈女〉と〈男〉のどちらかに分類される、という二分法的な区分を自明視する。

第二に、ポスト構造主義は、知と権力の結びつきを問題にする。ポスト構造主義のフェミニスト分析は、ジェンダーという二分法的カテゴリーが構築される中での権力の生成を分析することが可能となる点で、有効である。

第三に、ポスト構造主義は、近代的な主体そのものを問い直す。そのため、近代的な教育概念、発達概念そのものが前提とする主体形成そのものも脱構築の対象とする。したがって、そこでは、性/ジェンダーにもとづいて割り当てられる役割の「内面化」は前提とされない。

フェミニズムにおけるポスト構造主義の応用は、近代フェミニズムが総じて陥ってきた「ジェンダー本質主義」の呪縛からわれわれを解放しうる。すなわち、われわれは、生物学的性である「セックス」を基盤として、学習によって社会的・文化的性である「ジェンダー」を獲得するのではない。「セックス」は、それ自体、ディスコース実践としての「ジェンダー」によって作り出されたもの^{6) 17)}となる。

発達論および「二分法的ジェンダー」からの脱却

—フェミニストポスト構造主義の適用—

これまでに見てきたように、近代社会が看過してきた女性の存在に光をあてその解放を目指してきたフェミニズムは、今や近代が依拠する「主体」の問い直しをも射程に入れている。ここでは、欧米における子どもを対象とした社会学的研究のうち、従来の学習・発達のアプローチとは異なる研究に注目する。本稿では、ソーン、デヴィーズ、フランシスの著作をとりあげ、その内容を概観する。

1. 構築の視点／「二分法」の問題視

—ソーンによる「ジェンダー・プレイ」の分析—

まず、構築主義アプローチに基づく研究として、ソーンによる小学生の遊びの観察研究を紹介しておこう¹⁰⁾。彼女は、小学生の子どもによる運動場での遊びの観察を通して、子どもたちによるジェンダー構築を検討した。ソーンは、フェミニスト社会学に関する著作も発表しており、本稿で論じる彼女の著作『ジェンダー・プレイ』においても、フェミニストの視点が現れている。

ソーンは、子どもたち自身が受動的に大人からの価値を内面化するという「社会化」「発達」アプローチの限界を示し、子どもたち自身による日常世界の構築という視点を提示した。ここでは、子どもたちは単に「楽しむ」ために遊ぶのではなく、遊びを通して二分法的なジェンダーを作り出し、自らそれを演じる「行為者」である。彼女は、"borderwork"という語を用いて、遊びを通してのジェンダーの境界線を維持・強化する営みを明らかにした¹⁸⁾。

ソーンの議論のなかで、ここではとくに文化論的アプローチの問題¹¹⁾について紹介する。それは、「二分法的なジェンダー」に基づく記述の有用性と同時に、その限界をも示しており、彼女のスタンスを明らかに示すものである。

ソーンは、「女の子」の体験が顧みられてこなかった中で、「女の子文化」を明らかにしようとした点は評価できるとした。しかし、一方で、「女の子文化」「男の子文化」という二分法への還元は、ジェンダー内部の多様性を捨象し、ステレオタイプ的なパターンに観察結果を当てはめようとしている点で問題が多い。彼女は、「文脈におけるジェンダーを検討すること」により、ジェンダーの複雑さを明らかにすることが可能であると論じた(pp.107-109)¹⁸⁾。

2. フェミニストポスト構造主義の冒険

—デヴィーズとフランシスの探究—

1) デヴィーズ

—「ディスコース実践 discursive practices」への注目—

a. 基本的な立場

デヴィーズによると、ポスト構造主義は、ヒューマニズム (humanism) 理論と異なり、主体を固定したものとみなさない。ここでは、主体は一貫して進歩し続け、おのおのの人が日々の生活でアクセスできる「ディスコース実践 discursive practices」を通して構築され、再構築されるものである。

ここでは、「人間 person」は、社会世界に社会化される存在としてではなく、その(社会の)中に入るときに説明を求められる存在である。すなわち、それは受動的にかたちづくられるのではなく、自らかたちづくられるディスコースを自らのものとしてとりあげる存在である (p.3)¹⁹⁾。

デヴィーズは、ポスト構造主義の解放的な側面のひとつとして、われわれがかかわる複数のディスコースを認識することを許容している点を挙げている。したがって、彼女によると、自らが利用する異なった理論の間の矛盾

や不一致については心配する必要がない (p.165) ¹²⁾。

b. 明らかにしようとしたこと

デヴィーズは、ポスト構造主義の理論枠組みを用いて、幼児に対する「フェミニスト妖精物語feminist fairy tales」の解釈を行った。彼女は、それにより、子どもたちが言語的・身体的に自らを男性/女性に位置づける仕方を明らかにしようとした¹²⁾。なお、彼女は、5年後にも幼稚園児のうち7人を対象にインタビューを行い、ジェンダーについての語り、大人の権威についての語りを検討している¹³⁾。

デヴィーズは、ジェンダー秩序を個々人がとりあげる仕方を明らかにすることに関心を持った。そこで鍵となる概念は、「主体性 subjectivity」である。「主体性」とは、一人の人間が、自らに、他者に、そして世界に意味を付与する独特の仕方を意味する。それは、「社会的・文化的実践を組織し体系化する、論証的ネットワークの産物」(p.2) ¹²⁾である。彼女は、テキストとの関係を通しての子どもたちの「主体性」について検討しようとした。

デヴィーズの議論によると、男/女の二元論と大人/子どもの二元論は、その関係性において類似している。つまり、「女」あるいは「子ども」は、「男」あるいは「大人」に対する「他者」である (p.4) ¹²⁾。彼女は、この視点に立ち、子どもたちによるジェンダーについての解釈と大人の権威に対する解釈がいかに関連しているかを明らかにしようとした。

c. 明らかにされたこと

デヴィーズによる最初の調査において、男性に関する権力の考えは、子どもの言語実践と物語と遊びに埋め込まれていたことが明らかにされた。子どもたちは、男/女の二元論が所与のものとして構築されたディスコース的・相互作用実践に従属していた。他方、子どもたちは、多様性を受け入れるなど、それに対する抵抗をもする存在であった。

一方で、子どもたちは、一貫した筋書き (storyline) を用いて自らを構築していた。個々の子どもたちは、幼稚園時代と現在 (小学生) を比較したところ、ジェンダー秩序と大人の権威に関する「位置 position」¹²⁾に関する筋書きは一貫していた。

デヴィーズは、矛盾するディスコースの共存・並存が可能であるとする立場をとる。たとえば、上述のジェンダー秩序と大人の権威に関する実践および態度が一貫した筋書きに基づいていることは、「本質的な自我」というリベラルなヒューマニズムのディスコースを示しているようである。他方、そこにはフェミニズムのディスコ

ースも同時に存在している。このように一見矛盾するディスコースは、われわれそして子どもたちの日常世界における実践においては常に並存しているものである、と彼女は考える。

2) フランシス

—権力関係と抵抗のディスコース—

a. 基本的な立場

フランシスは、研究の始めにあたり、ポスト構造主義とフェミニズムの統合をめぐる議論を踏まえ、両者の有用な統合を試みた。

彼女は、デヴィーズの議論について、われわれが複合的で矛盾する仕方で考え行動するという点については賛成する一方で、次のような批判を行った。第一に、全体的な非一貫性や矛盾を受け入れることにより、反動的ディスコースの使用を是認したり、(解放を志向する)フェミニストの語りをまったく断片化したりしうる危険がある¹³⁾。第二に、そのようなつじつまの合わないアプローチの副産物として、研究業績の地位に関する重大な問題が生じる (pp.13-14) ¹³⁾。

そこで、彼女は、ポスト構造主義とフェミニスト・近代主義アプローチの結合を試みた (p.18)。前者に関連しては、子どもはいかにしてジェンダーを異なるものとして構築するかを明らかにしようとした。後者に関連しては、研究上の有用性のために、あえてジェンダー・カテゴリーを用い、解放を志向するディスコースであるフェミニズムの視点に基づく研究を行った。

b. 明らかにしようとしたこと

彼女は、小学生の子どもたちのロールプレイとインタビューを手がかりに、子どもたちのジェンダー構築を明らかにした。ロールプレイにおいて、病院、ホテル、学校という具体的な場面を設定したシナリオに沿って、子どもたちはそこで働く人の役割を演じる。ロールプレイのあとで、子どもたちそれぞれに、ロールプレイでの相互作用についてと学校と大人の職業でのジェンダーの問題についてのインタビューを行った。あわせて、インフォーマルな観察を行い、子どもたちの学校生活についての背景的な情報を得た。

c. 明らかにされたこと

子どもたちにとって、男の子と女の子は異なる存在であった。それは、服装のような視覚的な表象ばかりではなく、性格的にも二通りに分けられる存在であった。また、子どもたちは、ロールプレイを通して、ジェンダー・カテゴリーを構築していた。すなわち、多くの子どもたちは自らの性に沿った役割を演じていた。また、男

子は権力的な男性性を構築し、女子はその対としての女性性を構築していた(5-6章)。

子どもたちは、ジェンダーと大人の職業について、さまざまなディスコースを用いていた。それは大別して、男女は不平等であるとする「不公平のディスコース」と男女は平等であるとする「公平のディスコース」に分けられる。前者はジェンダーに関するステレオタイプを示し、対としてのジェンダー・カテゴリーを構築するのに用いられた。後者は、「公平さ」に動機づけられた場合や「不公平のディスコース」に抵抗するために用いられた(7章)。

子ども研究とフェミニストポスト構造主義

—意義および課題—

これまで、子どもの社会学においてフェミニストポスト構造主義研究を中心に概観した。ここでは、その意義について論じたのち、残された課題を提示する。

1. 意義

子どもを対象とした社会学的研究においてフェミニストポスト構造主義を用いることの意義は、非常に大きいだろう。

まず、子どもの社会学において基本的な概念である「社会化」概念について、大幅な問い直しがなされることになるだろう。子どもたちは、権威ある大人から何かを教えられ学ぶだけの存在ではない。子どもたちは、自ら世界を解釈し、構築することができる存在とみなされる。

近代以降、子どもは、かわいがりの対象であり教育の対象であった。そして段階的・線形的な発達を経た後に「人間」となるべき存在であった。ポスト構造主義の採用は、発達・教育すべき存在としての子ども観を転換することにもつながる。

つづいて、ジェンダーはそれ自体が言語的实践でありパフォーマンスである、という視点が提供される点についてである。ウォーカーは、「演技としてのジェンダー」という論稿のなかで、ジェンダーは実体というよりは幻想であり、人々はそのなかで演じ苦闘している、と論じている²⁰⁾。

子どもたちもまた、日々の生活のなかで、自らジェンダーに関するディスコース実践を行っている。かれらはたえず「二分法的なカテゴリーとしてのジェンダー」の構築に参加し、権力関係を構築し、自らをそこにコミットさせていくことができる存在である。

2. 残された課題

つづいて、ポスト構造主義とフェミニズムを統合した研究を行うにあたっての課題を述べる。

デヴィーズとフランシスは、いずれも子どもを対象とした社会学的研究において、ポスト構造主義とフェミニズムの結合を図ろうとした。しかし、両者の立場は微妙に異なる。デヴィーズは、ポスト構造主義とフェミニズム、あるいは近代主義や人間主義のように、異なる／矛盾する理論が共存することを許容する立場をとっている。これに対し、フランシスは、矛盾する理論の共存を許容することについては疑問を提示しつつ、むしろ実用的な観点より、両者の結合を目指しているように見える。

実際、矛盾する理論の共存を許容することについては問題が多いだろう。現代社会においては、たとえば性・民族・宗教・地域などといったさまざまなカテゴリーに沿った、「主体」による「客体」の抑圧は持続している。したがって、そこからの「解放」は、とりわけ抑圧される者＝「客体」にとっては重要な課題である。

ところが、先に矛盾するディスコースの並存・共存が可能であるという議論には問題がある。矛盾するディスコースの並存を許容することにより、「反動的」なディスコースも許容され、結局「解放」のディスコースは無化される。このことは「女」の「抑圧」からの解放を志向するフェミニズムについても同様で、「解放」そのものが無化される危険をはらんでいる。

とはいえ、ポスト構造主義の視点を採用することには有用な点が多い。具体的には、フランシスや西躰が論じるように、制度レベルではなくインフォーマルなレベルでの権力関係への視点を獲得することが可能となる。あるいは、女／男の二分法の自明視を問題にすることが可能となる。

そこで問題となるのは、子どもを対象とした社会学的研究に、フェミニストポスト構造主義をいかに応用するかである。二分法的なジェンダー・カテゴリーを自明視しないという立場をとるとはいえ、それをまったく研究で用いないことは困難である。結局は、フランシスも論じたように、分析上、ジェンダー・カテゴリーを用いることになるものと考えられる。しかし、それは、もはや、「セックス」を基盤として形成される「ジェンダー」を表象するものではない。むしろ、ディスコース実践を通して構築される「ジェンダー」とそれによってかたちづけられていく「セックス」のありようを捉えるために、便宜上用いられるものである⁽⁴⁾。

むすび

われわれは、標題に示したテーマ、すなわち「子どもの社会学におけるフェミニスト研究」において、「平等主義」と「脱構築」の双方を結合した方法論を採用する戦略が必要である。もはや、われわれは、「女／男」の二分法的なジェンダー概念、「主体／客体」「大人／子ども」などといった既存の社会的カテゴリーについては、脱構築の対象たりうることを無視できない。

しかし、現代社会において依然として残る「機会の不均等」に、プラグマティックな対応を迫られているのも事実である。その際、「平等主義」戦略を用いることは有効となる。とはいえ、問題とされている「平等」の内実はいかなるものであるかをたえず検証する必要がある。そして、「平等主義」戦略それ自体が、本質主義への還元に陥ってしまうことを自覚しておく必要がある。

この戦略は、日本における教育実践における分析においても応用可能である。教育現場における平等主義的働きかけが子どもの平等概念にとって必ずしも有効でないことは、いくつかの研究で示されている²¹⁾。このような状況にある教育実践に対するフェミニスト分析において、これまでに論じたポスト構造主義の視点は有効であると考えられる。なぜならば、それは、教育関係のもとでの「教師-子ども」関係を自明のものとして、子どもがアクティブなエージェントとして自ら構築を行うことも視野に入れることを可能にするからである。

現代社会の枠組みにあって、子どもを取り扱う研究は、「発達論」から完全に免れることはできない。『「発達する存在」としての子ども』『「教育の対象」としての子ども』というディスコースを超越する理論枠組みについては、コルサロがモデル図を示してはいるものの⁽¹⁵⁾、今後とも理論の精緻化が必要であろう。

以上の課題を踏まえつつ、子どもたちの日常に注目し、そのありようを描いていく研究調査の蓄積は、とりわけ日本において今後とも必要である。

注

- (1) 性役割尺度については、東・小倉 1982においてレビューされている。
- (2) 社会言語学分野において、女性語・男性語、あるいは言語における性役割に関する研究の蓄積は豊富である。たとえば、コーツ(訳書1990)²²⁾、レイコフ(1975)²³⁾が挙げられる。
- (3) 1980年代半ばにおけるテレビと性役割の発達に関す

る研究動向については、ダーキンによるレビュー²⁴⁾に詳しい。

- (4) たとえば、デヴィッドソンらの研究²⁵⁾によると、性役割ステレオタイプ度の低い番組を視聴した女子は、ステレオタイプ度が高いあるいは中立的番組を視聴した女子よりも、性役割ステレオタイプが有意に低い傾向を示した。
- (5) 基盤となる社会認識としては、近代の資本制における公的領域と私的領域への配分と性分業を前提にしたものからあえてそれを問題にしないものまで、目指す方向性としては、男性との機会均等を目指すものから女性の独自性を最大限に生かす社会の構築まで、さまざまである。
- (6) アメリカにおけるフェミニズムの第二波は、フリーダンの著作²⁶⁾をひとつの嚆矢とする。
- (7) 日本においても、1980年代から1990年代初頭にかけて、教育の中の男女平等が問題となった。たとえば佐藤²⁷⁾、池木²⁸⁾、伊東ほか²⁹⁾などの著作がある。
- (8) たとえば、菊池ほか³⁰⁾、吉原³¹⁾などは、女子大学生を対象にした調査に基づき、学生文化の女性内分化を明らかにした。
- (9) シム³²⁾によると、構造主義は、ソシール言語学に由来する。それは、言語をはじめあらゆる事象が構造を持ち、普遍的に記述可能であるとする。そして、レヴィ=ストロースをはじめバルト、フーコーなどさまざまな研究者は、構造言語学を応用し、文学・歴史・心理的な諸事象の背景にある原則を析出しようと試みた(115-116頁)。
- (10) なお、ソーンによる構築主義の視点は、コルサロによる子どもの社会学³³⁾にも継承されている。
- (11) 中村³⁴⁾によると、言語における性役割研究をめぐる論議においても同様のことが論じられている。言語の性差や言語活動における役割の性別による違いについて、女性と男性がそれぞれ異なる文化を共有しているために異なる言語を持っている、という説明がある(「文化差モデル」)。その説明に対して、社会の男性支配構造に言及していない、ジェンダー・アイデンティティと言語の関係を固定的に捉えている、違いのみを強調しており差別に言及していない、などという批判がなされた。
- (12) デヴィーズとバンクス¹⁹⁾は、フォローアップ調査において、ジェンダー秩序と大人の権威に関する子どもたちの「位置 position」の4つのパターンを析出した。それは、下記のとおり(p.6)。位置(i)：女性と男性の間に深遠な差異があると

いう事実は明らかに正しいが、ほとんど関心がなく議論の余地がない。しかし私自身のジェンダーは、行為および欲望のパターンにおいてよく熟達している。

位置 (ii) : 女性と男性の差異には関心があるが、観察できる差異が本当にあるか、明言することはできない。結局、あらゆる差異はたぶん表面的なものである。しかし、私自身の欲望のパターンは、自分のセックス/ジェンダーによく沿っている。

位置 (iii) : 女性と男性の差異は重要である。私は異性にふさわしいと考えられていることがらを価値あるものとし行いたいと思う。私の戦略は、差異について理論化し、あるいは差異を否定するよりは、むしろ異性(向け)の活動で例外的に優れることである。

位置 (iv) : 本質的に、女性と男性の間には差はなく(あってはならず)、私はどちらにもなれる。人をどちらかの性に割り当てるならば、社会秩序は誤っている。これはじっくり考えられた位置である。

(13) いわゆる「ポストフェミニズム」の思想がこれにあたる。それは、フェミニズムは時代遅れであるとし悪いものであるとし、その実践を無化する働きを持つものである(シム³²⁾, 278-279頁より)。ちなみに、竹村和子の言う「“ポスト”フェミニズム」³⁵⁾はむしろフェミニズムを自己参照的に自己拡大的に見ようとする視点を持つものであり、まったく意味を異にするものである。

(14) 筆者は、この立場により、幼児のジェンダー構築について実証的に検討を行った³⁶⁾。ここでも、ジェンダー・カテゴリーは、あくまでも二分法的なジェンダーがいかに構築されるかを描写するために、便宜上用いられたに過ぎない。これ自体、ジェンダーを取り扱う研究が「本質主義への還元」という危険性を絶えず持ちつづけていることの証左であると言えまいか。

(15) コルサロ³³⁾は、線形発達モデルに代わるものとして、「the orb web model (円形のくもの巣モデル)」を示した(p.25)。このようなモデルは、われわれの社会における教育観をも変えるものである。

引用・参考文献

1) 井上輝子, 上野千鶴子, 江原由美子, 大沢真理, 加納実紀代(編) 2002, 『岩波 女性学事典』岩波書店。

- 2) Ariès, Philippe 1960, *L'Enfant et la vie familiale sous L'Ancien Régime*, Plon (杉山光信, 杉山恵美子(訳) 1980, 『<子供>の誕生 — アンシャン・レジーム期の子供と家族生活—』みすず書房)。
- 3) Maccoby, Elenor E. & Jacklin, Carol N. 1974, *The Psychology of Sex Differences*, Stanford University Press.
- 4) 東清和, 小倉千加子 1982, 『性差の発達心理』大日本図書。
- 5) Money, John & Tucker, Patricia 1975, *Sexual Signatures: On Being a Man or a Woman* (=朝山新一, 朝山春江・耿吉(訳) 1979, 『性の署名 — 問い直される男と女の意味—』人文書院)。
- 6) 上野千鶴子 1995, 「差異の政治学」『岩波講座現代社会学11 ジェンダーの社会学』岩波書店, 1-26頁。
- 7) Carr, Peggy G. & Mednick, Martha T. 1988, “Sex Role Socialization and the Development of Achievement Motivation in Black Preschool Children,” *Sex Roles*, Vol. 18 Nos. 3/4, pp. 169-180.
- 8) Lever, Janet 1978, “Sex Differences in the Complexity of Children's Play and Games,” *American Sociological Review*, Vol. 43, pp. 471-483.
- 9) Cameron, Ellen, Eisenberg, Nancy, & Tyron, Kelly 1985, “The Relations between Sex-Typed Play and Preschoolers' Social Behavior,” *Sex Roles*, Vol. 12, Nos. 5/6, pp. 601-615.
- 10) Davis, John D. 1978, “When Boy Meets Girl: Sex Roles and the Negotiation of Intimacy in an Acquaintance Exercise,” *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol. 36, No. 7, pp. 684-692.
- 11) Fagot, Beverly I. 1978, “The Influence of Sex of Child on Parental Reactions to Toddler Children,” *Child Development*, Vol. 49, pp.459-465.
- 12) Davies, Bronwyn 2002, *Frogs and Snails and Feminist Tales: Preschool Children and Gender* (Revised Edition), Hampton Press, p.165.
- 13) Sadker, Myra, & Sadker, David 1985, “Sexism in the Schoolroom of the '80s,” *Psychology Today*, Vol. 19, No. 3, pp.54-57.
- 14) Streitmatter, Janice 1994, *Toward Gender Equity in the Classroom: Everyday Teachers' Beliefs and Practices*, State University of New York Press.
- 15) Francis, Becky 1998, *Power Plays: Primary School Children's Constructions of Gender, Power and*

- Adult Work*, Trentham Books.
- 16) 西鉢容子 1998, 「『ジェンダーと学校教育』研究の視覚転換 —ポスト構造主義的展開へ」『教育社会学研究』第62集, 5-22頁。
 - 17) Butler, J. 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge (=竹村和子(訳) 1999, 『ジェンダー・トラブル —フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社)。
 - 18) Thorne, Barrie 1993, *Gender Play: Girls and Boys in School*, Rutgers University Press.
 - 19) Davies, Bronwyn & Banks, Chas 1992, “The Gender Trap: A Feminist Poststructuralist Analysis of Primary School Children's Talk about Gender,” *Journal of Curriculum Studies*, Vol. 24, No. 1, pp.1-25.
 - 20) Walkerdine, Valerie 1989, “Femininity as Performance,” *Oxford Review of Education*, Vol. 15, No. 3, pp. 267-279.
 - 21) 木村涼子 1997, 「教室におけるジェンダー形成」『教育社会学研究』第61集, 39-54頁。
 - 22) Coates, Jenifer 1986, *Women, Men, and Language: A Sociolinguistic Account of Sex Differences in Language*, Longman (=吉田正治(訳) 1990, 『女と男とことば —女性語の社会言語学的研究法一』研究社出版)。
 - 23) Lakoff, Robin 1975, *Language and Woman's Place*, Harper & Row (=かつえ・あきば・れいのるず(訳) 『言語と性 —英語における女の地位一』有信堂)。
 - 24) Durkin, Kevin 1985, *Television, Sex-Roles and Children: A Developmental Social Psychological Account*, Open University Press.
 - 25) Davidson, Emily S., Yasuna, Amy, & Tower, Alan 1979, “The Effects of Television Cartoons on Sex-Role Stereotyping in Young Girls,” *Child Development*, Vol. 50, pp. 597-600.
 - 26) Friedan, Betty 1963, *The Feminine Mystique*, (=三浦富美子(訳) 1986, 『増補 新しい女性の創造』大和書房)。
 - 27) 佐藤洋子 1978, 『女の子はつくられる』白石書店。
 - 28) 池木清 1991, 『女性の教育と職業』北樹出版。
 - 29) 伊東良徳, 大脇雅子, 紙子達子, 吉岡睦子 1991, 『教科書の中の男女差別』明石書店。
 - 30) 菊地栄治・加藤隆雄・越智康詞・吉原恵子 1993, 『女子学生文化にみるジェンダーの現代的位相』。
 - 31) 吉原恵子 1995, 「女子大学生における職業選択のメカニズム —女性内分化の要因としての女性性一」『教育社会学研究』第57集, 107-124頁。
 - 32) Sim, Stuart (ed.) 1998, *The Routledge Critical Dictionary of Postmodern Thought*, Routledge (=杉野健太郎, 下楠昌哉(監訳) 2001, 『ポストモダン事典』松柏社)。
 - 33) Corsaro, W. A. 1997, *The Sociology of Childhood*, Pine Forge.
 - 34) 中村桃子 2001, 『ことばとジェンダー』勁草書房。
 - 35) 竹村和子(編) 2003, 『思想読本(10) “ポスト”フェミニズム』作品社。
 - 36) 藤田由美子 2004, 「幼児期における『ジェンダー形成』再考 —相互作用場面にみる権力関係の分析より一」『教育社会学研究』第74集, 329-348頁。